

エルフにTS転生したら、めちゃくちゃムラムラするんだが？

前ぽー不知火

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

クツソ高貴なエルフにTS転生してしまった元男が、オ○ニーをしようとするお話です。

4 3 2 1

--	--	--	--

14 10 6 1

目次

「…んお、おーい、こっちだこっちー!」

真昼間。辺りには人だかりができて始めているというのに、オレは公共の迷惑とかを考えず、大声を上げる。クラクションがならないんだもん仕方ないよな。

今まで辺りをうろちよろしながら探していた友人は、オレの存在に気付くと、幾人かの静止を振り払い、すぐにオレの車に乗り込んできた。

「なんだ、こんなところにいたんですか。さっさと外行きましょうよ」
「いやはや、見て分かんذار。それに、外クソ寒いし。ここはあつたかいぞ」

季節は冬。月は師走。空にはどんよりとした黒雲が広がっていて、まるでデイドラボツチみたいだ。

確か、今朝の天気予報では、今日の最高気温は10℃にもいかないだとか。久しぶりの寒さに、思わず体もブルリと震える。

「まあ確かにあつたかいですけど…。じゃあ、僕もここに居座るとしましようかね…。」

「おいおい、冗談やめろよ最強ニート。お前は少しオレと話をしてくれるだけでいいんだぜ?報酬はたんまりだ」

「いやいや先輩こそふざけないでくださいって。僕がそんなことできるふうに見えますか?」

「…あー、そうだな。じゃあ最期まで付き合ってくれよ」

ふと、目の前の友人との出会いを思い出す。

あれは、高校生の頃。コイツは今でこそムツキムキの黄金の肉体を所持しているが、あの頃はひよろひよろのガリガリだった。

クラスのヤンキーAに、いいようにこき使われる惨めな姿。オレは自分勝手な正義感を振りかざし、ヤンキーAを征伐したのだ。

結局、ヤンキーAの仲間を呼ぶで、ヤンキーBやらCやらがこんぼう装備して出てきやがったから、オレもボコられたんだけどな。

オレに憧れたとかで、しばらくオレにひつついてきてた。今度はオ

レがパシリにしているみたいで、気分が悪かった。

だから、『友達になろうぜ。上下関係とかない。ただの友人に、な』なんてクサイ科白をはいてしまったのだ。結果としてよかったものの、あれは今でも思い出す黒歴史ナンバーワンだ。

「そんで… お前はオレを守るとか生意気にも言い出しやがってよ…」。オレは世渡り上手だから、問題ねえっていったのにさ」

「まあ、僕は先輩に一目ぼれでしたからね。男なら、好きな人にいい恰好見せたいものでしょう？」

「ハッ、オレに男の尻を追う趣味はねえっての…。男なら最高の友人。女だったら…。まあこんなことにはならなかったかもな」

「まあ、先輩女運ないですもんね…。アレは嫌な予感がするからやめろって、何回も言ったんですけどねえ」

「ホントだよ。オレもバカだったなあ。こんなことになるなら…。そう、それこそお前とでも…。な…。だからよお」

「泣くなつて。オレも泣きたくなつてくる」

オレの胸から生えている真っ赤な棒は、ただの木だ。最も、シートを貫通して、そもそも車自体貫通しているし、抜けようがないのだが。

じわじわと体の末端から熱が奪われていくのを感じる。背中はこのなんにも熱いというのに。熱力学第二法則に反してるんじゃないか？

今まで暗澹たる灰色の空を映し出していた車窓がパリんと割れ、熱気が直に顔面を炙りにくる。

ガソリンにでも本格的に引火したのか、先ほどとは勢いの違う炎が俺たちの乗る車を包み込む。

友人だつて酷いけがをしている。この車が急に爆発し、木に激突した時、車外に思いっきり吹き飛ばされてしまったのだ。腕も、足だつて骨折していることだろう。頭どころか体の至る所から血を垂れ流しているし、コイツじゃなかつたら死んでも可笑しくない。

脳裏に、卑しく笑うあの女の顔が思い描かれる。好きだのとほざい

てて、結局こうやってオレから保険金を雀りのうのと生きていくわけか。まあ、だまされるオレも悪いんだけどな。

「…先輩、どうせならこれからのこととか話しませんか？」

「これから？…オレも、お前ももうこれで終わりだろ。次なんてない」

「まあそうですけど。そうじゃなくて、ほら、転生とかそういうやつですよ。どうせならそういうのに期待してみても面白いんじゃないですか？」

「…ハハハ！いいな、それ…。そうだな、オレは魔法使いとかがないな。あととちよつとしたハーレムとか、それに耐えられる肉体なら最高かもな」

子供の頃夢想した、最強の自分。オレはどんなゲームでも魔法使い最強理論を崩すことはなかったし、どれだけ魔法使いが弱いゲームでも、諦めないでジャイアントキリングを成し遂げたことがあった。実際に自分がそういうのになるって考えると、少し怖いかもしいが、少なくとも今よりは楽しそうだ。

「いいですね。じゃあ僕は、子供の夢見るような最強の剣士ですかね…。魔法使いになった先輩のこと、守ってあげますよ。僕は一途ですからね」

「ハハハ、ほざくじゃないか！魔法使いは守られる程華奢じゃないぞ。いざとなれば近接戦闘だってできるんだからな」

「それは、先輩の使ってたキャラだけですよ…。というか、実際に杖って結構な攻撃力ありそうですね」

「ハハハ…。ハハ…。あ…。すまん。眠くなってきた」

「いいですよ、先輩。すぐに追いつくんで、先に行つててください」

プツン、という音がして、世界が真っ暗になる。もはや肉体は限界に達しているからなのか、特に驚くこともなく、冷静に『あ、視覚消えたな』なんて認識できた。

「せんぱい、さいご…。い…。か」

手は動かない。足も動かない。口も、動かない。脳だけが、意識だけが、力を失いかけているその聴覚になんとか神経を集めようと働い

ている。

「……、……、す……た……」

——ああ、知ってたよ。

「……」

随分と懐かしい夢を見た。この世界に転生してきてから何度も夢見た、前世の最期の記憶。最近はめつきり見ることもなく、もはや忘れかけていたものだが、久しぶりに見る事ができた。

体の上のしかかっている少し重い布団をずらし、天蓋付きのベッドから降りる。

冷や汗でびっちょりと濡れた服をパサリと脱ぎ落し——

——現れたのは、白磁の肉体。誰にも触られたことのない、シミ一つない真っ白な体を月光が照らし出す。ほんのすこしのふくらみもない平野では、二つの桜色のつぼみが、淡く光を反射しながら、自分の存在を誇示するようにピンと立っている。

視線は、自然と下へ下へと吸い寄せられていく。月明かりの届かぬ聖域。そこには、かつて雄々しく存在していた息子の姿はない。ぴつちりと閉まった、未使用のヒミツの場所。

…… 実に、ムラムラします。ああ、神よ。この身を汚すことをお許してください——ッ

手を下腹部まで伸ばしたところで、ハッと気づく。視線を後ろに向けると、そこには、手に着替えを持つ付き人の姿。恍惚とした笑みを浮かべていてまたもやムラツとしますがそこは気にしない。

そうだった…… そうだった…… あぶないあぶない。どうして失念していたのか。高貴なフェアリーエルフの名を汚し、王家の御名に泥

を塗るわけにはいかない。

そう、オレは今生を、エルフの王族、それもフェアリーエルフとして生きることを天に定められた。フェアリーエルフというのは、精霊に愛されたエルフの異種のこと、ただできえ精霊の加護を受けているエルフの王族から、精霊に愛され体質のオレが生まれたのだ。丁重に扱うどころの騒ぎではない。それはもう、伝家の秘宝なんかよりも慎重に、懇切丁寧に扱われている。

ここ、エルフの王城の最奥、オレの部屋に侵入してくるものなど可能性は極めて0に近い。しかし、万が一、いたずら好きな精霊によって何か間違いが起きてしまうかもしれない。そういう考えから、オレには常に、エルフの中でも最強格の存在が交代しながら付きまといっている。

まあ、別にオレを心配するってのは分かる話だし、付き人がついてるっていうのもまあ理解はできるんだが……

ここで、問題になるのが、一人の時間なのだ。そう、ちよつとおませなお子さんなら暇さえあれば励むべき時間である。しかし、俺にはそれが無い。生まれてからずっと。気が狂いそう。オレに人権はないのか。エルフだからか？エル権はないのか？

簡単に言おう。俺の今の悩み。それは――

オ○ニーが、したいッ
!!!!!!

こんなことなら死ぬ前に腐るほどシコつとけばよかった……。オレは初めて、前世の最期を後悔した。

——朝の読書。オレは紅茶を嗜みながら、本をペラペラとめくる。ムラムラを抑えながら。

エルフの集落というのは、基本的に精霊の多く住む森の中に形成される。オレの住むこのクインシアの里というのは、エルフの集落として最大規模を誇る……らしい。

と、いうのも身の回りの奴らが過保護すぎて、オレを他の里に連れて行かせてくれないから実際他のところの規模何て知らないのだ。箱入り過ぎて泣ける。

精霊というのは自然の化身であり、精霊が多いほど自然は豊かで、自然が豊かなところにはそれだけ精霊が多くいるという証左にもなる。

エルフの里の名前は、そこに住む精霊の中で最も強いもの、一般的には大精霊という格に分類されるものから取られる。つまり、わが里の名であるクインシア、というのはこの森の大精霊のことを表しており、また、この森でもっとも強い存在であることも意味している。エルフの集落として最大規模を誇るこの里で一番強いということは……まあ簡単に言えば、この世で最も偉い精霊ということだ。

ちなみにオレは王家の一員なので里の名であるクインシアの性を持つが、だからといって大精霊クインシアの親族かとかそういうわけではなく、それ自体には大して意味はない。ただの苗字のようなものだ。

——ペラツと本をめくるたびに、肘が柔らかい無駄肉に触れる。そういうえばムラムラとペラペラってなんか言葉の響きが似てるよな。ムラムラする。

で、この里の名であるクインシアという大精霊。この世界では知らない人がいない程の知名度を誇るほど有名なのだそう。なんでも、魔王を倒したことがあるとか。そこらへんは実際のところよくわからないが、私すごいですオーラが体中から発散されてるし、まあ本当に強いのだろう。オレもムラムラを発散したいものだ。

——ペラペラ。ペラペラ。ムラムラ。ペラペラ。ムラムラ。ペラ
ムラ。ペラムラ。ムラムラ。ムラムラムラムラムラ……

「……クインシア、いい加減この駄肉をどうにかしろ」

「ぴやうんーひ、ひどいアリシアちゃん！……えへへでもなんだかア
リシアちゃんにそう言われるとなんだか……む、ムラムラしてきちや
うわ……」

「無敵か？」

あ、そういえば申し遅れました。オレの名前はアリシア・クインシ
ア。王位継承権第一位の常時ムラムラ希少種ロリロイヤルフエア
リーエルフです……。そしてオレの背もたれ兼イスとなっているの
が大精霊クインシア。あと今ちよつと貞操の危機です……。

そもそもこの駄肉との出会いは2日ほど前までさかのぼる。

この世界に来てから先ほど話した通り、オレは希少種の属性過多エ
ルフではあるものの、一応は王家のものとしてそれなりの教育を受け
なければならぬということになった。

しかし、元異世界人のオレが、この世界のことを知っているわけが
なく、なんなら一般常識すら危ういのだ。そのため、まずは子供向け
の絵本を読むことにしたのだ。

絵本だからといってバカにすることはできない。絵本というのは
活字を読むのが苦手な低年齢層向けに開発されたものであり、つまり
オレであれば比較的簡単に読めて、なおかつそれなりにこの世界で一
般常識となりうる知識を得ることができるのだ。

中には道徳心を養うための必要のないものもあるが、そこはオレ自
身が取捨選択すればいいだけのことで、その日は性欲を紛らわすため
にも一日中書齋にこもって読書をしていた。

「あなたが、アリシアちゃんですか？」

そこで、出会った。急に部屋の中に誰かいる気配を感じ、ふと顔を
あげれば、そこには女神と見紛うレベルの女性がいた。

身体の表面からなんかキラキラ光る粒子出してるし、めっちゃくちゃ神々しい後光がその存在感を高めており、控えめに言っても女神なんて目じゃなかった。

「く、クインシア様ですか…?」

「あら。私のことを知っているなんて随分とお勉強熱心なんですね」

ただ、その姿はちょうど読んでいる絵本に出てきたものと酷似しており、その正体はすぐに分かった。クインシアはうふふと顔に手を当ててにっこりと笑いかけてきた。

ついでにオレは、一つ衝撃的な発見をした。

(すげえ… きれいすぎるとムラムラすら感じないのか…)

控えめにいっても女神の容姿であり、美しいという言葉で形容するには足りないほどではあるものの、その姿を見ても自分が何かしらの情欲を抱くことはなかった。

「やべえ。アリシアちゃん可愛すぎる… ペロペロしても怒られないかな… よし、いくか」

「…!?!」

小さくボソツとつぶやいたその声にわが耳を疑った。ペロペロ…?なんだ、ペロペロってなにかの隠語か?まさか淫語のほうじゃないよな?淫語… やべえムラムラ再燃してきたな。いやさすがに高貴な大精霊がそんな変態なわけが…

「ぎゅ〜♡」

「?!?!… ツ!?!」

「?!?!はふう… れろ…♡くちゅ…♡」

「?!?!」

「?!?!あまくておいしい♡」

「?!?!や、やややめろお!!」

「?!?!きゃん!」

大慌てで、突き飛ばす。一応オレの肉体スペックはこの属性過多に見合うレベルで高く、走れば風と一体化できるくらいの速度は出せるし、パンチとかも結構いたい。というかただの人間くらいなら普通に

一発で殺せる。

しかし、自分の顔についた謎の粘液を服でふき取りながら、そんな力で突き飛ばしてしまったので、一瞬で冷静になり、一応の心配をする。

「あ、あの… すいません、大丈夫ですか…？」

「えへ… えへへ」

「うわ、変態だ」

だめだこの大精霊。突き飛ばされたのに無限にえへえへしてる。ついでにえへ顔ダブルピースキメるくらい余裕がある。心配して損だった。つーかこのネバネバ全然とれないんだけどなに、お前口の中にスライムでも飼ってる？

「へ、変態つて… やだ、ムラムラしてきちやうわ…」

「おい、大精霊。威厳はどうした」

なんだコイツ。罵倒されてムラムラするとかもう無敵か？無敵の方か？逆に失望がすぎてムラムラしなくなってきた。コイツはムラムラバキュームだ。オレのムラムラを全部吸い取って自分のムラムラに変換する大性霊だ。悪鬼め…

というか、なんだその無駄に揺れる肉は。はあはあしながら左右に振るんじゃない。オレがないことへの当てつけか？いやないことに別に劣等感感じてたりしないが？

「おい、駄肉」

「くく!!今ちよつとイツちやった…。えへへえ、なに、アリシアちゃん!!」

つ、強すぎる…。コイツは無敵だ。多分何をしても相手のムラムラに変換されてしまう。しかも変換率多分300%くらいはある。ここまで一瞬でイメージが壊れることなんてないぞ…

「頼むからもうしゃべらないでくれ…」

「ほ、放置プレイ!?出会った初日にそんなハードな… でもしゆき♡」

「うがああああ!!」

だめだこの性欲大精霊。はやくなんとかしないと。

変態駄肉ムラムラバキュームマシンと一緒にいることで、自分のムラムラを抑えつつ日々の生活を送ること数日。

「いややっぱオ○ニーしたいな…。」

心の声が漏れてしまう。はあ、今ではもう漏れるとかいうしようもないワードですらムラムラを覚えてしまう有り様だ。

もちろん、あの大精霊何某と一緒にいれば、失望感とかそういうのでムラムラを感じることはないのだが、だからといってオ○ニーをしない理由にはならないのだ。

考えてみてほしい。みんなは今まで「あ、ムラムラしてきたからオ○ニーしよう」なんて思ってからオ○ニーをしてきただろうか。いや、違うだろう（決めつけ）

「ご飯やお風呂、寝る時間が基本的に習慣として固定されてるように、オ○ニーも習慣として固定されてきたはずだ（？）」

お昼ご飯を食べるとき、空腹からよりも、お昼の時間になったからを理由にしてご飯を食べるだろう。逆にお昼の時間でなければ、おなかがすいてたらお菓子などを間食として取るものの、それはお昼ご飯としては扱わないはずだ。

つまり、それと一緒になのである。

「ムラムラしてきたからオ○ニーをしよう！」ではなく、「こんなにもオ○ニーをしてないなんて大変だ、すぐにオ○ニーしないと！」という義務感のもとにオレの肉体はムラムラの如何に関わらずオ○ニーを求めているのである。

ついでに言うとな自分の肉体がどれくらいほどシコリティが高いのも多分常時オ○ニーしたい欲の原動力エンジンとなっているかもしれない。

「ドゥルル、ドゥルル、ブーン！オ○ニー、発進します!!シユポー!!」

身近というかゼロ距離に犯したい肉体（しかも発情状態！）があるのだ、抜かねばこちらは無作法というもの…となってしまうのも仕方のないことだろう。

ちなみに今オレは一人の状態だから好き勝手喋れてるが、扉の隙間からこつちを監視してる激強侍エルフがいることはすでに聴覚でとらえているので、この世界には多分存在しないであろう日本語で話している。

オレのことを警護するエルフは侍の姿のやつと、魔法使いっぽいとんがりフードのやつと、忍者みたいなえっちなかつこしたやつの全3パターンだ。こいつらはオレの超六感がクソつよオーラを検知してるし、最初の自己紹介でお互い以外には負ける気はないとか大言吐いてたから多分エルフ最強格だ。全員クツソ美人でえっちだ。心臓と心のおちん○んに悪い。あとは多分そんな強くないメイドエルフ。このメイドエルフはいつも顔が同じなのでオレ専属という感じなのだろう。コイツも美人でえっちだ。オレの心のおちん○んはすでにまっしろしろすけ、パアン！ってしたらきつと手がネバネバすることだろう。

話を戻して、オレはこの世界に来て、まず言語を覚えた。なんとなくは頭に入っていたが、軽く絵本をいくつか読むことで、オレの聡明な頭脳はオレの意志関係なしに、自動的に言語体系を解き明かし勝手に習得していた。頭の中に高性能AIを飼ってる気分だ。マスターってオレのことを呼んでくれないかな？

そういうことで、オレは既にエルフ語をマスターしており、日本語とエルフ語を使い分けることができるバイリンガルなのだ。今気づいたがバイリンガルってなんかえっちだな、h e n t a i だな。素晴らしいな、g r e a t だ。

そしてそんなオレはストーカーエルフ目線では、ひとりで部屋の中で謎の言語を話すロリヤルどちやしこエルフだ。うーん、頭おかし子認定されたくはないけど... まあ口に出した方がいろいろと発散できるし、オレの精神性欲安定のためだ大目に見てくれ。

「アリシアちゃん！えっちしにきたよー！」

「帰れ駄肉」

「ああん♡そっけないところも... す・て・き♡きゃー♡」

床につつぷしたかと思いきやそのままクツソ高級そうな絨毯で床

オナする大精霊ダニクシアをジト目で見やりながら、考えを続ける。そもそもとして、オレは元はそんなに性欲が強いほうじゃなかった。毎日1回してはくらいで、時々2、3回することはあったけども、友達と遊ぶ前日は控えたりしてたし、数日間の旅行のときも禁欲しても何も問題はなかったのだ。

それが、なぜか今は抑えるのに必死なほどにムラムラは膨れ上がっている。いつこの堤防が崩れシモの大洪水が起きてしまうかわからない。時すでにエマーゼンシーだ。

「…んっ♡…んっ♡」

しかし、オ○ニーをしようにも、常に誰かしらの目がある現状、簡単に決行することはできない。

部屋でベッドに入っているときは、ドアの間隙からエルフの警護がこつちを覗いてて、となりでは大性霊がオレの寝顔でオナってる。

「アリシアちゃんの匂い…花のようで…はう」

お風呂に入っているときはメイドエルフが常にお世話してきて、入浴開始してオレの身体を丁寧に洗って水つけを完璧にふき取りお風呂からでるまで片時たりともオレから目を離そうとしない。警護エルフもなぜか服着たまま風呂場に入ってきてオレのことをじーっと見てる。ついでに大淫魔はオレの裸体をオカズに風呂場を無駄に粘液まみれにする。

「あっ…♡…はひゅう…♡」

書斎にいるときも、ご飯を食べているときも、どこをとってもオレの周りには遠くから見守る警護エルフとメイドエルフ、ついでに大精霊を名乗る変態がいて、1人の時間というのは1秒たりとて存在していないのだ。さすがにつらい。

ここまで過保護気味なのは若干違和感を感じるレベルだが、オレは一応王位継承権第一位でエルフ歴初のロイヤルフエアリーエルフなのだ。きつと、これが普通なのだろう。となるとほかのロイヤルエルフがどのような性欲を発散させているかは非常に気になるころではあるが。

「んう…もういつかい…」

「なんで人の部屋で二回戦を始めようとする?… うわ絨毯ネツバネ
バじゃんどうしてくれんの?」

「か、身体で払いますのでどうか… ♡えへ、えへへ」

「クソがご褒美は聞いてねーんだよ」

さすがに目の前で達されるのはいくらムラムラしない存在だとい
ってもムラムラを感じてしまうおそれがあるので目を背け放置し
たまま部屋から出る。アイツ相手にムラムラするなんて屈辱過ぎて
とても耐えきれそうにないし、なんか負けた気分になるからいやだ。

「アリシア様、どうかしましたか」

「… なんでもない」

あとなんか周りの言動からうすうす察してたんだが、あの変態はオ
レ以外にはどうやら見えならしい。謎の粘液も時間がたてば勝手に
なくなってるし、随分とご都合的な存在なことだ。オレもその力を
手に入れられれば公衆の面前だろうとお構いなしにオ○ニーできる
というのに!!オレの目の前でわざわざオ○ニーする理由がわからん。
ほんとにオレに惚れてるわけでもねーだろーし。オ○ニーできない
オレへの当てつけか?クソが、やっぱアイツクソだな。

あーーー!!オ○ニーしてーー!!!

エルフの朝は遅い。オレ達王族や精霊、そして外部に携わる仕事に
関係のある人以外は大抵昼過ぎ頃まで寝ている。

これは別にエルフという種がどうかそういうわけではなく、
平和すぎるこのエルフの里という環境によるものだ。実際に、昔のエ
ルフも血を流し争っていた時代では、こんな昼過ぎまで惰眠を謳歌す
るなどといった生活はしていなかった・・・と、この世界でのお父さん
がボヤいていたのを覚えている。

そして、こういった生活が外部に知られているからなのか、エルフ
に纏わる迷信というのはかなりの数あったりする。

有名なのは、『エルフと待ち合わせをするときは2時間遅れて行け』
や、『エルフはレストランのメニュー選びに30分かかる』などといっ
たものだろうか。実際には、エルフも起きようと思えば起きられる
し、楽しみにしていた約束とかだったら時間通りに行動する。もちろ
ん、メニュー選びに30分かかるエルフなどいない。いたとしても、
それはエルフゆえに、ではなくただのそういった性格の存在ゆえの行
動だ。そんなわけで、迷信というのはそのほとんどが真実ではなく、
それを聞くほうも、本当だと思っただけで生きている者の方が少数だ。

さて、ここで一つ。とある迷信を紹介しよう。

別種族の者が、エルフの王城や、民家の構造を見るたびに、揃って
首をかしげる点がある。気になって聞いてみれば、「それは何のため
に必要なのか」と逆に質問を返され、驚くことがよくあるというのだ。

そう、ないのだ。

トイレが。

荒唐無稽な都市伝説ほど、真実が隠れているとはよくいったものだ。「エルフはトイレをしない」、誰が広めたのか定かではない——一聞にして一蹴する——その迷信は、実のところ、全くの真実であったのである。

オレがそれに気づいたのは、もはや限界に達していた我が奥に秘められし膀胱が、破滅の辰を宣告した時。

以来、誰も掘り返すことのなかった黒歴史の1ページは、今。

「はわわ、やっぱりアリシア様はすごいです〜」

「ふふ、その時私も思ったのだよ。『やはり私の仕える御方は、この方を除いて他にはいない』…とな」

「はっアリシア様が最高なのは当たり前のことでしょうもつとまじめに讃えないとぶつころすわよっ」

何故か目の前で武勇伝として、公開されていた…。オレ、帰ってもいいですか？（涙目）

涙が零れ落ちるのを耐えながら、話に耳を澄ます。ちなみにオレは今、朝の魔導書読書タイムであり、めちゃくちゃ集中しているオーラを出している。あまりにも強すぎる集中オーラのせいか、いつもは樹液に吸い寄せられるカナブンのように飛び寄ってくる大精霊の姿もない。ただそれだけで室内なのにひどく空気が澄んでいる気がする。アイツいると外でも空気が澱むんだよなあ。もうそれだけでオレは救われた気分になってるのだが、結局はこの姦しエルフ組のせいでプラマイゼロだ。いやむしろムラムラゲージが上昇するからマイナスなのかもしれない。

本音を言うためちやくちや騒音で邪魔（ムラムラ的にも邪魔！）なのだが、この脳内お花畑エルフ共はいったい何をどう勘違いしたのか、そろって女子会をオレの部屋で繰り広げてやがる。

先日まで「アリシア様の邪魔などできません（キリッ）」ってどや顔で言ってたのは何処のどいつだあ…。？おまえら3人全員だよこのアホ共!!

「というか何!?オレのおもらし騒動で、なんでオレに忠義ささげようとしてんの!?変態か?それともオレのおもらしこそを忠義の対象でも思ってるの!?遠回しにオレがおしっこにも劣るとか罵倒すんのやめろ!!この国宝ボディじゃ不満か!?それともオレの常時ムラムラIVがいけないのか?仕方ねーじゃんお前ら顔面&ボディ偏差値高すぎなんだよいい加減にしろ!!」

と、内心でぶちまけたところで現状が変わるわけではない。今の状況を变えたければ行動を起こさねばならないのだ、たとえば王族エルフであろうともな。

パターンと本を閉じ、未だオレのおしっこに忠義をささげる話をしてる姦しエルフ娘共に近づいて一言。

「…うるさいから、出てって」

これだ。仮にも警護対象の主君である。そんな存在から不機嫌クールボイスで「出てって」と言われれば配下は出ていく以外の行動はとれないだろう。ごく一部の変態(大精霊ナントカのような)には逆効果だが、アレはアレでアイツ自体がどちらかといえばオレよりもえらい存在尚且つ不可視であることから許されているのだ。アイツ以外の、例えばただの一般妖精なら消し炭にして自然に還元させてるところだ。

「はわっ、け、結婚してくれって、そ、そんな急に…でもわたしもすき…です…」

「おい待て、今のはどう考えても私にだ。お前みたいな無駄乳魔法使いなわけがない」

「エセ侍はだまってなさい。今アタシがプロポーズを受け取るところ

よ

よ

あれオレエルフ語間違ってる覚えてたか?…いや、今の普通に間違っていないよね、うん。うん?え、どういうこと?

「え、どういふこと?」

「え?」

「ん？」

「？」

え、こわ。なんでみんなポカンとしてるん？オレ間違ってるよ？今出て行って言ったよね？あれ？

「えっと…あの、うるさいから出てってほしいんですけど…」

「はわわ！も、申し訳ありませんでしたアリシア様！」

とんがり帽子のウィッチエルフが慌てて謝罪を口にする、合わせるようにして侍エルフも忍者エルフも謝罪し、ぴゅーっという擬音が付きそうなほど急激な速度で部屋から出ていった。

「…え？」

部屋にポツンと残されたオレ。あれ、なんか一瞬変態大精霊と同類の匂いがしたのに、ぜんぜんそんなことなく、普通に出ていったぞ？最初のアレはなんだったんだ？え、気のせいとかそんなことあるか？

「…気のせい、疲れてるのか…？」

「疲れてるなら私の胸に！この豊満な胸に！ドーンって!!」

「うるせえ、っーかいつ来たし」

なんかいろいろの衝撃で結局ムラムラゲージもいつの間にか下限まで落ち着いてしまった。精神安定的にはよろしいが、心のおちん○ん的にはちよつとしょんぼり。いや、結局いつのまにかコイツ来てたしオ○ニーできなかつただろうから全然ありがたいんだが。

「えへへ、そういうえばおしっこ大丈夫？またごくごくしてあげてもいいよ！えへ、えへへ」

「前はしたみたいに言うな。お前が勝手に飲んだだけだろ変態。それにもう、精力に変換できるようになつたしな」

「へ、変態って…♡やっぱリアリシアちゃんに罵倒されるとそれだけでイキそうになっちゃうわ…♡」

「うつつつつつつぎ」

そういうえば、トイレ騒動の件は結局のところオレがエルフの肉体の使い方をイマイチ理解できていなかったのが原因だった。

エルフの肉体は摂取した栄養などを一切の老廃物を出さずにすべて自分の精力に変換できるめちやくちやエコな肉体なのだ。だから、

おしっこもう○ちもしなくてよく、トイレも存在しない。

オレは、精力に変換する方法を知らず、色々と奔走したり体当たりしたり人を投げ飛ばしたりして、結果的に外でまき散らす羽目になったのだが、その際に地面に飛び散ったソレをかき集めて飲んでいたのがコイツだ。あの時は素直に引いた。3日くらい無視したらさすがに謝られたが、もう1回飲みたいていったからまた3日くらい無視した。そしたら最終的に恥も外聞もお構いなしという具合で大性霊の名に恥じない汚らわしさを存分に発揮し24時間粘液製造マシンになったので仕方なくかまってあげることにした。その後も態度はなにも変わってないしなんなら前より汚くなったから毛ほども悪かったとは思っていないのだろう。ほんとクソだなコイツ。

ちなみにこの精力は魔力みたいなものでえっちな方の精力ではない…。らしい。なんでもエルフが魔法などを使うときには自然の精霊を介して行っているから精力なんだとか。でもムラムラするから多分えっちな精力だと思う。やっぱりえっちなじゃないか。最高だ。

「それにしてもお前さつきまでどこにいたんだ？」

「… あー、アリシアちゃんとかえっちな妄想しながら大樹の中でオニーしてた！えへへ、いっぱい愛液ふりかけてきたからきつと自然も元気になってるよ」

「お前もう自然に謝れ」